太陽の塔 再生
——生命（いのち）の空間がよみがえる

平野（ひらの） 暁臣（あきおみ）

いま太陽の塔の内部を再生するプロジェクトが進行中だ。耐震補強を施した上で塔内を復元／公開する計画で、二〇一八年春のオープンを目指している。

こう話すと、若者たちは一様に驚いた表情を見せる。太陽の塔は知っていても、認識は〝大きな彫刻〟であり、中はドンガラだと考えているのだ。半世紀も封印されてきたのだから、無理もない。

いうまでもないが、太陽の塔は大阪万博テーマ館という「パビリオン」の一部である。内部にはダイナミックで幻想的な展示空間が広がっていた。中心は高さ四五メートルの《生命の樹》だ。

一本の樹体に、単細胞生物から人類まで、進化の歴史をたどる二九二体もの「いきもの」がびっしりと貼りついている。この周りをエスカレーターで上りながら、始原のときから営々とつづく生命の生長と変貌を間近に見ていく、という仕掛けだった。

アメーバは下等で人間が最上級、と訴えているわけではない。逆だ。どんないきものも一本の幹に連なる存在であって、違いなんかない。足元をよく見てみろ、根源を見ろ。そう語りかけている。

地下から天空へと貫いて伸びる生命の時間。根源から立ちのぼり未来へと向かう生命力のダイナミズム。そして生命の尊厳。

岡本太郎の生命観がそのまま形になっている。

塔内は真っ赤だ。当時、太郎は「生命の樹は太陽の塔の〝血流〟だ」と語っていたらしい。動脈、静脈、神経系、リンパの流れ—。そして内壁の赤い襞（ひだ）は〝脳の襞〟〝知の襞〟だ、と。

塔内空間は単なるディスプレイではない。太陽の塔の内臓なのだ。太郎は臓物を内包するいきものとして太陽の塔を構想していたのである。

塔内は廃墟（はいきょ）同然だった。生命の樹は傷み、生物群の多くは失われてしまった。それを丁寧に復元するのだが、機械的に「元通り」にするわけではない。最新の技術を使って、当時の演出意図をより効果的に実現する工夫を凝らすつもりだ。当時やりたくてもできなかったことに挑戦したい。

この再生は、単に「万博の遺構のひとつが復元される」というレベルの話ではない。太陽の塔が内臓を取り戻すということであり、ふたたび生命が吹き込まれるということなのだ。

いよいよ太陽の塔が目を醒ますときが来た。

あのとき岡本太郎が日本社会に問い掛けたもの。それは〝いのち〟だ。太郎のメッセージはいまを生きるぼくたちにきっとまっすぐ届くだろう。太陽の塔が仕事をするのはこれからだ。

プロフィール
1959年東京都生まれ。空間メディアプロデューサー／岡本太郎記念館館長。イベントやディスプレイなど〝空間メディア〟の領域で多彩なプロデュース活動をおこなう。岡本太郎関連では「明日の神話」再生プロジェクト、生誕百年事業などに続いて、太陽の塔の再生プロジェクトにとり組んでいる。『万博の歴史』『大阪万博』『岡本太郎と太陽の塔』（いずれも小学館）ほか著書多数。

月刊 みんぱく

4月号目次

1 エッセイ　千字文
太陽の塔 再生——生命（いのち）の空間がよみがえる
平野 暁臣

2 インタビュー
吉田憲司新館長に聞く
開館40年、これからのみんぱく

10 ○○してみました世界のフィールド
第二の家族　ウィン一家
深川 宏樹

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
半人半魚の女神たち
山中 由里子

16 新世紀ミュージアム
カナダ歴史博物館
岸上 伸啓

18 手芸考
工芸館所蔵の「手芸的」なもの
木田 拓也

20 ながなんぢゃ
「フェイクニュース」としてのキラキラネーム
小林 康正

21 次号予告・編集後記